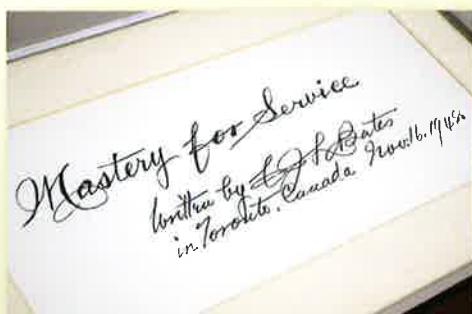


輝く自由

関西学院 その精神と理想

The Spirit of Kwansei Gakuin



Mission Statement



When Kwansei Gakuin was founded in 1889, it was a very small school. In addition to the founder, Dr. Walter R. Lambuth, there were 5 teachers and 19 students. Now, after more than 120 years, it has become a comprehensive educational institution with 7 campuses and about 27,000 students from kindergarten through graduate school. Although the size has changed dramatically during those years, the ideals held by our founder are still reflected in our core values. In order for this "spirit" which has guided Kwansei Gakuin since its foundation to be shared and become familiar on every campus, the Mission Development and Promotion Committee as part of the New Strategic Plan has prepared this booklet, *The Spirit of Kwansei Gakuin*. We hope that it will be used in a variety of settings, and will help to cultivate the intellectual, cultural and spiritual strength of all the members of our Learning Community, thus nurturing world citizens who embody our school motto, "Mastery for Service."

Chancellor Ruth M. Grubel

Mission Statement

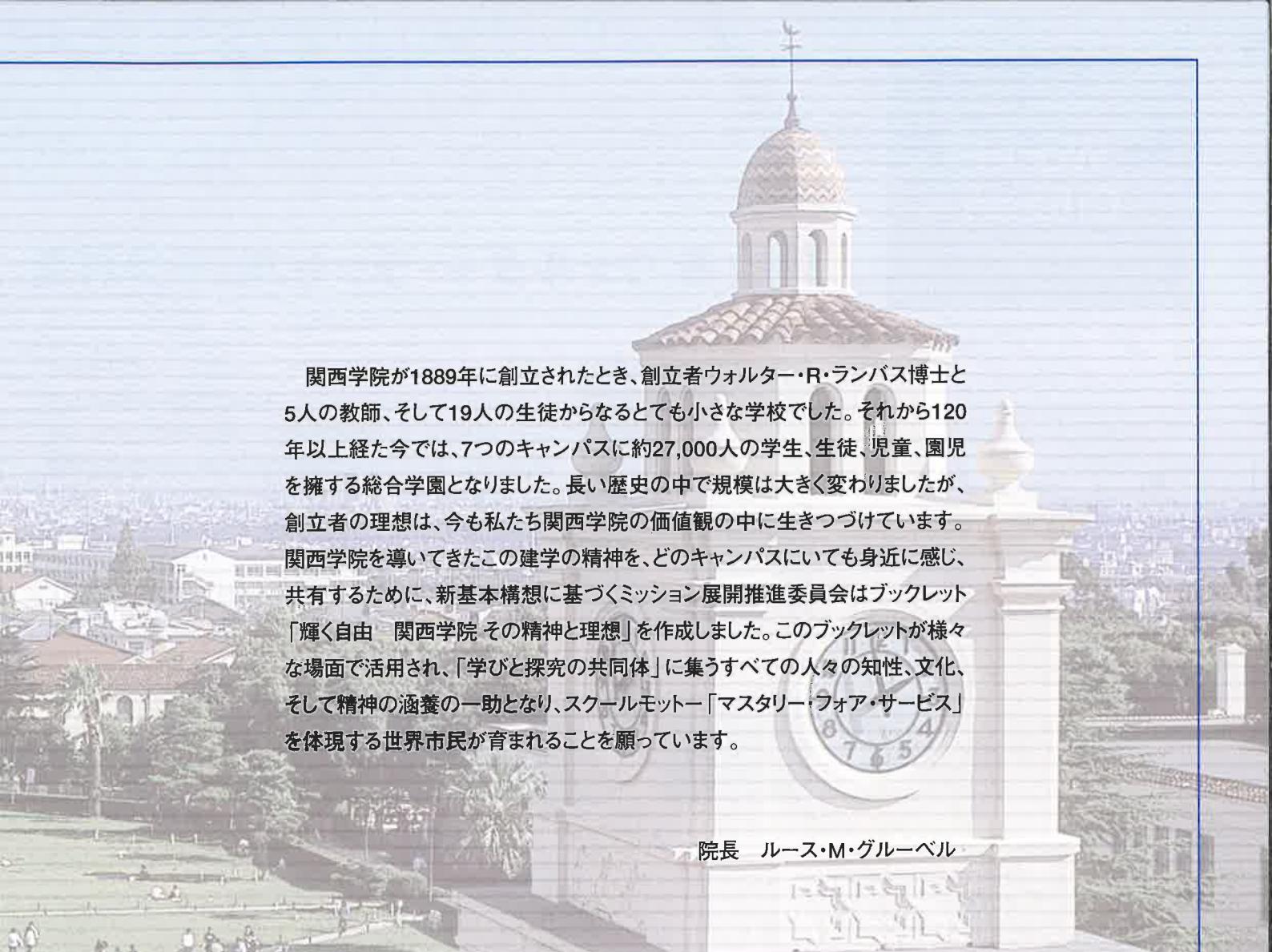
Kwansei Gakuin, as a learning community based on the principles of Christianity, inspires its members to seek their life missions, and cultivates them to be creative and capable world citizens who embody its motto, "Mastery for Service" by transforming society with compassion and integrity.

By describing Kwansei Gakuin as a "learning community," we understand that education and research are collaborative endeavors. KG was founded on "the principles of Christianity," and these principles continue as the core of its existence. This refers to learning about the theological and cultural aspects of Christianity, including the significance of Jesus Christ, but it also means that all the goals and values of this community are firmly rooted in Christian ideals. Human rights, peace, respect for nature, social justice, and cross-cultural understanding are prime examples of such values that guide our

studies and life together.

Through this educational environment, all the members, who include students and their families, faculty, staff, and alumni, are motivated to seek new knowledge, and the full life that is most suited to each, based on individual talents, interests, and abilities, as well as social needs. "Life missions" also include vocations in Christian Ministry, one of the original courses at Kwansei Gakuin, and this training continues as an important element of the Christian principles. The content of a KG education nurtures people to develop social, moral, and academic skills

that allow them to participate creatively around the world, and take leadership as agents of change in the societies where they live, thus actualizing the ideal of "world citizen." Like Kwansei Gakuin's founder, Walter R. Lambuth, world citizens have the skills to communicate and empathize with others, and then take responsibility for creating a better world. KG's motto, "Mastery for Service," is explained further by emphasizing that its motivation must be the care and concern for others.



関西学院が1889年に創立されたとき、創立者ウォルター・R・ランバス博士と5人の教師、そして19人の生徒からなるとても小さな学校でした。それから120年以上経た今では、7つのキャンパスに約27,000人の学生、生徒、児童、園児を擁する総合学園となりました。長い歴史の中で規模は大きく変わりましたが、創立者の理想は、今も私たち関西学院の価値観の中に生きつづけています。関西学院を導いてきたこの建学の精神を、どのキャンパスにいても身近に感じ、共有するために、新基本構想に基づくミッション展開推進委員会はブックレット「輝く自由 関西学院 その精神と理想」を作成しました。このブックレットが様々な場面で活用され、「学びと探究の共同体」に集うすべての人々の知性、文化、そして精神の涵養の一助となり、スクールモットー「マスタリー・フォア・サービス」を体現する世界市民が育まれることを願っています。

院長 ルース・M・グルーベル

ミッションステートメント

ラーニング コミュニティ
関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命とします。

関西学院は「学びと探究の共同体」であり、私たちは、教育と研究を二つにして一つの、また、すべての構成員によって担われる協同の営みであると考えています。建学の理念である「キリスト教主義」は、今もなお学院に息づく精神的基盤です。このことは、イエス=キリストという存在のもう一つ意味を含めて、キリスト教の宗教的側面と文化的側面の双方が探究されることを意味し、同時に、学院という共同体の目的と価値のすべてが、キリスト教の理念に強く根ざしていることを示しています。私たちの学びと人生をともに導くそのような理念の主要な例として、人権、平和、自然への

敬意、社会的正義、異文化間の相互理解があげられるでしょう。こうした学院の教育環境を通じて、児童・生徒・学生とその家族、ならびに教職員、同窓生のすべては、社会の要請に応え、また、一人ひとりの資質、関心、技能に応じて、新たな知を探究し、各にもっともふさわしい充実した生—すなわち「生涯課題（ライフミッション）」—を追求します。

「生涯課題（ライフミッション）」の語は、学院発足当初の目的であったキリスト教伝道者への召命も意味しますが、そのための教育は、現在もキリスト教主義教育の重要な要素として引き継がれています。関

西学院の教育は、社会的、道徳的、学術的な力を涵養することで、そこで学ぶ者が創造力をもって世界で活躍することを可能にし、ひいては、自らが生きる社会を変革するための指導力を發揮するように促します。これは、「世界市民」という理想実現のための手段にはかなりません。世界市民とは、学院の創立者ウォルター・R・ランバスのように、他者と対話し共感する能力を身につけ、よりよい世界の創造に向けて責任を担う人々のことです。関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”は、他者への関心と思いやりに支えられたときにはじめて十全の意味をもつのです。

創立者 ウォルター・ラッセル・ランバス

The Founder, Walter Russell Thornton Lambuth (1854-1921)



関西学院の創立者であるアメリカ人宣教師(南メソヂスト監督教会)ウォルター・ラッセル・ランバスは、1854年に両親の赴任先であった上海で生まれました。祖国アメリカで医学と神学を修め、中国に戻って医療活動に携わりながら宣教師として活躍し、1886年に32歳で日本に赴きます。

1889年、牧師養成と青年への全人教育を目的とした男子校の創立を計画し、原田の森(現在の神戸市灘区)に木造校舎を建造して関西学院(クワンセイガクイン)と名付けました。始まりは教師5人と生徒19人の小さな学校でした。



W.R. Lambuth.

世界の足跡

ランバスはわずか4年余りの日本滞在期間に数々の教会や学校の創立に関わり、大きな足跡を残しました。離日後も、その圧倒的な行動力によって南米、キューバ、アフリカ、ヨーロッパ、シベリア、中国、朝鮮半島など世界を駆け巡り、伝道活動を続け、特にアフリカへの医療伝道を人生の目標（ライフミッション）として情熱を傾けました。

ランバス家の故郷ミシシッピー州には、一家の働きを記念する碑が建っています。そこには、"World Citizen and Christian Apostle to many lands"（世界市民であり、世界各地へのキリストの使徒）という句が刻まれています。



ランバスの略年譜

- ① 1854年(0歳) 宣教師である両親の任地中国・上海にて誕生。

② 1860年(6歳) 母、妹とともに米国へ帰国。母の実家(ニューヨーク州ケンブリッジ)に預けられる。

③ 1861年(7歳) 父の故郷ミシシッピー州パールリバーで生活。
1864年(10歳) 中国に戻る。

④ 1869年(15歳) 帰国し、テネシー州レバノンの高校へ通う。

⑤ 1871年(17歳) エモリー・アンド・ヘンリー大学(ヴァージニア州)に入学。
1875年(21歳) エモリー・アンド・ヘンリー大学を卒業し、さらにヴァンダービルト大学(テネシー州)で神学と医学を修める。

1877年(23歳) ヴァンタバート大学を首席で卒業。デイジー・ケリーと結婚し、新妻とともに中国にわたって医療活動を開始。上海に麻薬中毒療養所を開設。

⑥ 1881年(27歳) 一時帰国し、ペルビュー大学病院(ニューヨーク)で東洋の疾患を研究。医学博士号を取得後に英国にわたり、ロンドン大学、エдинバラ大学などで最新の医学研究に従事。

⑦ 1882年(28歳) 中国に戻って、蘇州病院を開設し、本格的な医療伝道を開始。

⑧ 1884年(30歳) 北京にメソヂスト病院(北京協和病院)を開設。
1886年(32歳) 南メソヂスト監督教会が日本宣教を開始。日本宣教部総理に就任。神戸の住居の一部に読書室(現パルモア学院、啓明学院の前身)を開いて伝道・教育活動を開始。

⑨ 1889年(35歳) 関西学院を創立。初代院長に就任。

⑩ 1891年(37歳) 夫人の健康上の理由などで米国に帰国。わずか4年余りの日本滞在であったにもかかわらず、関西学院を創立しただけでなく、阪神間、広島、山口、香川、愛媛、大分に13の教会を創設した(「ランバスの瀬戸内伝道図構想」A～M)。

⑪ 1894年(40歳) 南メソヂスト監督教会の海外ミッションを統括する任務に就く(以降、16年間)。ブラジル伝道に着手(以後、6回伝道)。

⑫ 1898年(44歳) キューバ伝道に着手(以後、18回伝道)。
1907年(53歳) 南メソヂスト監督教会全権代表として来日。関西学院で卒業式に出席して演説。

⑬ 1910年(56歳) 教会最高位のビショップ(監督)に選任される。エディンバラでの世界宣教会議で第2部門の議長を務める。

1911年(57歳) 幼い頃からの夢であったアフリカ伝道を開始。
1913年(59歳) 第2回アフリカ伝道。

⑭ ⑮ 1914年(60歳) 中央アフリカ・コンゴに伝道拠点(現在、そこに功績を記念してランバス記念病院が建てられている)を開設。メキシコ伝道を開始(以後、16回)。

1915年(61歳) 第1次世界大戦を通して世界YMCA運動や赤十字を支援。

⑯ ⑯ 1918年(64歳) メソヂスト年次総会で戦争問題委員会委員長に選任され、ヨーロッパに出発。パリに同委員会本部を設置。ベルギー、チェコ、ポーランドなどでも伝道。

⑰ 1919年(65歳) 中国、朝鮮、日本を含む東洋地区伝道の担当監督となる。会議のため来日し、関西学院チャペルで講話。

⑱ 1920年(66歳) ウィルソン大統領の特命により、体調不良を押して中國大陸を北上し、飢餓災害地帯を視察。新聞に詳細なレポートを掲載し、救援活動に従事。シベリア伝道を開始。

1921年(66歳) シベリア、中国、韓国を経由して日本に入り、宣教師会議を開催中に発病して横浜で死去。関西学院のチャペルで告別式が催された。遺骨は上海の外国人墓地に埋葬された。

School Motto



 **C.J.L.ベーツ (1877~1963)**
The Fourth President,
Cornelius John Lighthall Bates

カナダ・メソヂスト教会宣教師。第4代院長。1877年、カナダ・オンタリオ州生まれ。クイーンズ大学を1901年に卒業。1918年、モントリオールのウェスレアン神学校から神学博士号を受けました。1902年に東洋伝道への献身を決意して来日。

カナダ・メソヂスト教会が関西学院の共同経営に参与した1910年、関西学院に赴任し、2年後に新設の高等学部長となり、1920年に関西学院第4代院長に就任しました。

高等学部長の時に提唱した "Mastery for Service" が、院長就任とともに、学院全体のスクール・モットーとなりました。院長として20年間にわたり関西学院発展のために尽力し、学院の悲願であった大学昇格に際しては、渡米して連合教育委員会およびアメリカ・カナダ両国伝道局の承諾を得、1932年に大学開設を果たすなど学院の礎を築きました。

"Mastery for Service"
the school motto of Kwansei Gakuin reflects the ideal
for all its members to master their abundant
God-given gifts to serve
their neighbors, society and the world.

関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”は、
「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるため、
自らを鍛えるという関学人のあり方を示しています。

Mastery for Serviceについて ～真理・自主・奉仕～

“マスタリー・フォア・サービス”は今日、関西学院全体のスクールモットーであるとみとめられています。1912年、初代高等学部長となったC.J.L.ペーツに提唱されて以来、校歌「空の翼」に唱われ時計台のエンブレムに刻まれて、関西学院のキリスト教主義教育をみちびく指針として時代をこえて受け継がれてきました。

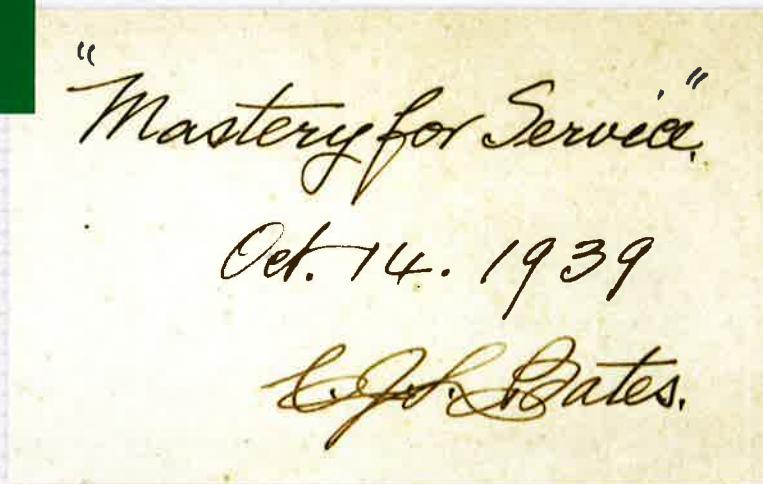
マスターとは練達、サービスとは奉仕であって、「奉仕のための練達」と翻訳されます。勉学にはげみ知識・技能をよく修め(マスター)、みずからに与えられた才能を存分に發揮して人格の完成に努めます。しかしそれは、隣人・社会・世界のために奉仕し人類の福祉に貢献すること(サービス)を究極の目的とするのです。この言葉には英語で、マスター(主人)とサーバント(召使い)という意味深い対照があります。仕えるために「支配するもの、主人」となること、「召使い、

僕」となるために知識・技能の主人、自分自身の主人となることが求められます。それは「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」(マタイ20章26~27節)といいうイエスの逆説にみちた言葉に示された精神と同じものです。

そこで真に仕える者は、常識にも何ごとも縛られない自由の人、自分自身にもとられない自主の人にならなければなりません。関西学院のさらに歴史の古いモットー「真理将使爾自主(真理はあなたたちを自由にする)」が語るように、聖書に示された真理を探求することによって「真に仕える実力をそなえた自由人」になりえるとの理解がここにあります。そのような人間形成こそが「輝く自由、Mastery for Service」と唱う関西学院が求めつづけるものなのです。

〔真理将使爾自主(真理は汝らをして自主たらしめる)〕(ヨハネ8章32節)

関西学院発祥の地、原田の森にたつ神学館の正面玄関の上には、この聖書の言葉を刻んだ額面が掲げられていました。この言葉は神学部のモットーであっただけでなく、学院全体のモットーでもありました。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか」(マタイ16章26節)の聖書の言葉に通ずる学院の人格教育の伝統がこのモットーに示されています。ペーツは、この言葉に語られた自主(自由)こそが「マスタリー・フォア・サービス」を体現する人格の基礎となることを強調しています。



Our College Motto "Mastery for Service"

Dean C.J.L. BATES, M.A.

Human nature has two sides, one individual and private, the other public and social. There is a life which each man must live alone, into which no one else can enter. That is his personal individual life. But a man's life is more than that. It has another side, which it shares with other men. And it is our duty and privilege to keep before our minds these two sides of our nature. There is an ideal of life corresponding to each side. One is self-culture, the other, self-sacrifice. These ideals are not contradictory, however, but complementary. Neither is complete by itself, nor independent of the other. Self-culture pursued for its own sake produces selfishness. Self-sacrifice as the only rule of life leads to weakness. But self-culture as a basis for self-sacrifice is not only justifiable, but necessary. And self-sacrifice on such a basis is truly effective.

Now these two phases of our nature are implied in our college motto "Mastery for Service". We do not desire to be weaklings. We aim to be strong, to be masters - masters of knowledge, masters of opportunity, masters of ourselves, our desires, our ambitions, our appetites, our possessions. We will not be slaves whether to others, to circumstances, or to our own passions. But the purpose of our mastery must be not our own individual enrichment, but social service. We aim to become servants of humanity in a large sense. In England the officials are called civil servants, and the highest officials Ministers of State. That implies a true conception of the nature of the work of an official. His duty is not to command, but to serve. In fact, a man is great only to the extent to which he renders service to society.

This then is our college ideal, to become strong, effective

men, not weak incompetents; men who will be recognized as masters. But having become masters we desire not to inflate, and enrich ourselves for our own sake, but to render some useful service to humanity in order that the world may be better for our having lived in it.

Our ideal business man is neither a gambler nor a miser, but a man who succeeds because he is a master, a man who understands the fundamental principles of business, who knows what to do, and who by industry and honesty is able to succeed where other men might fail - a man whose object in life is not merely to increase his credit balance in the bank, but to use his financial power to improve the condition of society; - a man who has public spirit, and a keen sense of social duty. Such a man will be revered by his employees, and respected by his customers.

Our ideal of the scholar is not a kind of intellectual sponge that always takes in, but never gives out until it is squeezed; but it is a man who loves to acquire knowledge not for its own sake, much less for the sake of his own fame, but whose desire for knowledge is a desire to equip himself to render better service to humanity.

It is said that on the monument of a certain man there were cut the words "Born a man and died a carpenter." We desire no such fate. For such an end is failure. Nor would it be any greater success if it were written "Born a man and died a merchant" - or "a millionaire" - or "a politician." To be a man, a master man and at the same time a true servant of humanity is our ideal.

This essay was published in 1915 when Kwansei Gakuin was an all-male school.



私たちの校訓「マスタリー・フォア・サービス」

C.J.L.ベーツ

人には二つの面があります。一つは個人的で私的な面、もう一つは公的で社会的な面です。

人それぞれに、ただ一人で生きるべき生活があり、これには誰もたちいることができません。それは一人ひとり別々の、個人としての生活です。しかし、人の生活はそれだけのものではありません。もう一つの面が人の生活にはあります。この面を私たちは他の人々と分かち合っています。人のこの両面をつねに心にとめておくことが私たちの責務であり、また与えられた恵みです。

このそれぞれの面にふさわしい人生の理想があります。一つは自己修養であり、もう一つは献身（自己犠牲）です。しかも、この理想は相反するものでなく、むしろ相補うものです。いざれも、一方だけでは完全でなく、もう一つの理想から独立したものではありません。自己をきたえることを、ただそれだけを目的に追求するとすれば自己本位になってしまいます。一方、自己をささげることが人生の唯一の規範であるならば、“意気地なし”ができあがります。しかし、自己の修養は献身の土台なのですから、それは正当なものであるばかりか、必要なものです。自己修養のような土台があってこそ献身はほんとうに効果を発揮するのです。

ですから、校訓「マスタリー・フォア・サービス」という言葉が意味するのも、人にこの二つの面があるということなのです。私たちは“弱虫”になることを望みません。私たちは強くあること、“さまざまことを自由に支配できる人”（マスター）になることを目指します。マスターとは、知識を身につけ、チャンスをみずからつかみ取り、自分自身を抑制できる、自分の欲、名誉や飲食や所有への思いを抑えることができる人です。

私たちは、他人や境遇、あるいはみずからの情念に“縛られた人”（奴隸）になるつもりはありません。私たちがマスターになろうとする目的は、自分個人を富ますことでなく、社会に奉仕することにあります。私たちは、広い意味で人類に奉仕する人になることを目指しているのです。英国では、公職にある者が“国民への奉仕者 civil servants（公務員）”と呼ばれ、最高位の公職者が“国家のしもべ Ministers of State（国務大臣）”と呼ばれています。これは公職者の働きの本質をうまく表わした呼び名です。公職にある人の責務とは命令することでなく、仕えることなのです。

要するに、人の偉大さはどれだけ社会に奉仕をおこなったかによって決まるのです。それゆえ、本校の理想は強くて役に立つ人になることであり、弱くて使いものにならない人になることではありません。それぞれがマスターと認められる人になることです。しかし、マスターになったとしても、威張ってみせたり、贅沢をしたりすることを望むのではなく、この世界が、自分が生きていたことによって、より良くなることを目的として、人類のために何か有益な奉仕をすることを願うのです。

私たちが理想とする事業家は賭博師でも守銭奴でもありません。マスターであるがゆえに、成功する人、事業の基本原理を理解しながらすべきことを知っている人、他の人ならば失敗しかねない場合でも勤勉と正直により成功を収める能力がある人です。たんに銀行の預金高を増やすことではなく、その財力を社会状況の改良に用いることを人生の目的とする人、公共心をもち、社会的義務に鋭い感覚をもっている人なのです。そのような事業家は従業員からも敬愛され、顧客からも尊敬されるでしょう。

私たちが理想とする学究の徒は、ただ知識を吸収するだけで、絞られるまで他に与えない、知識のいわばスponジのようなものであってはなりません。知識を喜んで探求するとしても、ただ知識を得るためにではなく、ましてみずからの名声のためではなく、人類により良い奉仕を行うことを目指して知識を探求することが学究のるべき姿です。

墓碑に「人として生まれ、木工（たくみ）*として死す」などと刻まれることがあります。私たちはそのような人生の結末を望みません。そのような終わり方は人生の成功とは言えません。「人として生まれ、商人として死す」あるいは「人として生まれ、大金持ちとして死す」「人として生まれ、政治家として死す」—そのいずれであっても、同じように成功だとは言えないのです。真に人である、つまり「マスター」であると同時に人類に真に「仕える人」であること、これが私たちの理想とするところです。

*）「木工（たくみ）」とした言葉は“carpenter”です。ベーツは、「木工の家」に生まれたナザレ人イエスを想起しながらこの言葉を記したと思われます。その場合、「人として生まれた」イエスこそが「生ける神、世の救い主（キリスト）」であるというキリスト教のメッセージが前提にされています。したがって、その趣旨は職業の貴賤を論じることではありません。

この英文は、高等学部商科の学生が1915年に刊行した『商光』創刊号に、C.J.L.ベーツ高等学部長（後の第4代院長）による講演論説「OUR COLLEGE MOTTO “MASTERY FOR SERVICE”」として掲載された歴史的文書です。“College”は高等学部（商科の他に文科がありました）の英文名称で、当時の関西学院は男子校でした。C.J.L.ベーツは、原田の森時代に初代高等学部長となり、高等学部のモットーとして“Mastery for Service”を提唱しました。この言葉は当時の高等学部校舎であった旧本館内に大書され、上ヶ原移転の後は時計台（旧図書館）正面の楣間（びかん）と中央講堂のプロセミアン・アーチに掲げられ、全学院のモットーとみなされるに至りました。

関西学院を形づくった人物たち

ジョン・ウェスレー (1703~1791)

メソヂスト運動の創始者。英国国教会司祭の家庭に生まれ、幼い頃に火炎の中から救出されたことから強い召命感を抱くに至る。国教会の司祭となり、弟のチャーチルズらと「神聖クラブ」(後の「メソヂスト」)の活動を指導。その後モラヴィア兄弟団の人々の敬虔な信仰に触れて「回心」し、87歳で亡くなるまで伝道に尽力。彼の死後、この運動はメソヂスト教会として国教会から独立し、特にアメリカで広まった。



吉岡美國 (1862~1948)

第2代院長。京都市に生まれる。兵庫ニュース社に勤務していた時期に日本伝道を開始した直後のランバス父子と出会い、彼らとの交流を通して信仰を得、学院の創立に協力。1890年アメリカのヴァンダビルト大学神学部に留学、帰国した92年に院長に就任、以来1916年まで院長を務めた。「敬神愛人」を唱え、関西学院発展の基礎を固めた。



W.M.ウォーリズ (1880~1964)

ウイリアム・メレル・ウォーリズは、米国生まれの建築家で、原田の森の煉瓦造校舎群や、上ヶ原に移転した際にスペニッシュ・ユニオンスタイルに統一した新キャンパスを設計した。数多くの西洋建築を手がけ、本学の時計台を含む多くの建築物が国の登録有形文化財に指定されている。若きベーツも出席していたカナダ・トロントにおける学生世界宣教義勇大会にウォーリズも出席し、アジアでの宣教活動を決意したと言われている。近江兄弟社を設立してメンソレータムの販売などによる実業的活動を通じ、熱心な伝道活動を開いた。



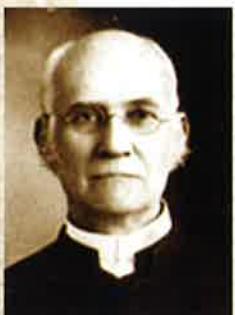
ジェイムズ・W・ランバス (1830~1892) メアリー・I・ランバス (1833~1904)

学院創立者ウォルターの両親、ジェイムズ・ウィリアム・ランバスと妻メアリー・イザベラは、結婚直後宣教師としてアメリカから上海に赴任。1886年神戸に転任。自宅読書館や西日本での宣教活動を展開。メアリーは聖和の源流となる神戸女子学校(神戸婦人伝道学校)を開設。夫は神戸で亡くなったが、その後もメアリーは日本で6年間働き、最晩年を中国で過ごし上海に葬られた。



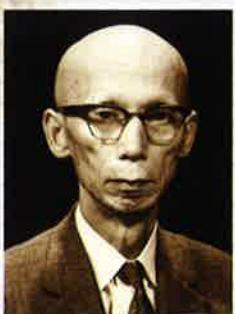
J. C. C. ニュートン (1848~1931)

第3代院長、初代図書館長。1848年米国サウスカロライナ州に生まれ、南メソヂスト監督教会牧師となり、88年に来日し、翌89年の関西学院創立とともに初代神学部長に就任。「関西学院育ての親」と慕われ、創設期の学院と苦楽をともにした。敬虔な生活と精魂を傾けた教育によって人々に偉大な感化を与え、終生、愛と奉仕の生活を続けた。



矢内正一 (1900~1984)

新制中学部初代部長を18年間、関西学院理事長を5年間務める。イギリスのパブリックスクールに教育の理想を求めて、神を畏れ、学力のみならずキャンプ、駆け足等によって、身体・精神を鍛える教育を実践した。「美しく、正しく、強い心の持ち主となれ」というモットーは「矢内イズム」として継承され、少年たちに夢と希望を与え、現在の中学部教育の支柱となっている。





1894年、関西学院創立期に制服及び制帽の決定に際し教員・生徒からなる委員会が設定され、生徒から新月（弦月・三日月）、教員から「K.G.」の2文字が提案され、これらを総合して現在の校章が決定された。それは私たちが、月が太陽の光を受けて自らを輝かせるように、神の輝きをうけて自らを輝かせる者であるとの自覚と、新月がやがて満月へと完成を目指して輝く存在であるように、ひたすら理想を憧れ求めて進歩向上してゆくことを象徴するものと意味づけられている。

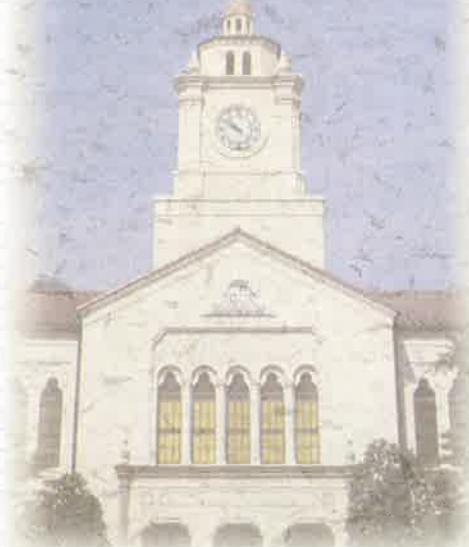


エンブレム

スクールモットー“Mastery for Service”を土台にした橋の中央に十字架をかたどり、4つのシンボルを配置。右上は新月を表し、中学部を意味する。左上は聖書を表し神学部を、右下はギリシャ（ローマ）神話における商人の守護神ヘルメス（マーキュリー）の杖を表し高等学部商科を、左下は知識・文化の光「松明（トーチ）」の背後にペンを配して高等学部文科を意味している。第4代院長C.J.L.ベーツにより、キャンパスが上ヶ原に移転した1929年に制定された。

校歌「空の翼」

北原白秋 作詞
山田耕筰 作曲



新校歌発表会 中央は山田耕筰

校歌「空の翼」は1933年に、前年の大学昇格を記念する意味もあって、北原白秋が作詞し、同窓の山田耕筰が作曲しました。それ以前の1900年頃に歌われていたのは、「Old Kwansei」。このほかに、創立50周年を記念して1939年に作られたのが、”第二校歌”と呼ばれる「緑濃き甲山」。また、1949年に創立60周年を記念して作られたのが、「A Song for Kwansei」です。

1. 風に思う空の翼
輝く自由 Mastery for Service
清明ここに道あり我が丘
関西 関西 関西 関西学院
ポプラは羽ばたくいざ響け我等
風 光 力 若きは力ぞ
いざ いざ いざ 上ヶ原ふるえ
いざいざ いざ いざ上ヶ原ふるえ
2. 眉にかざす聖き甲
萌えたつ緑 Mastery for Service
躍々更に朗らよ我が自治
関西 関西 関西 関西学院
(以下繰り返し)
3. 旗は勇む武庫の平野
遙けし理想 Mastery for Service
新月ここに冴えたり我が士氣
関西 関西 関西 関西学院
(以下繰り返し)

Words



ことば

I shall be constantly watching.

私は常に見守っていよう

(ランバス)

学院の創設者W.R.ランバス最期の言葉(1921年9月に横浜で死去)。ランバスは、軽井沢の宣教師会議で発病。前立腺肥大治療のため入院、手術を受けた。経過は良好だったが、その後心臓発作を併発し、9月26日午前5時35分、J.C.C.ニュートンらに見守られ、66年の生涯を終えて天に召された。

Noble Stubbornness

(烟歎三／ジョン・ドライデン)

「ノーブル・スタボネス(Noble stubbornness)」は、関西学院大学体育会のモットーで「高貴なる粘り」「品位ある不屈の精神」「気品の高い根性」などと訳される。1920年に硬式庭球部の烟歎三部長(高等学部教授)が部の標語として掲げ、後に体育会全体のモットーとなって総合体育館や中学校校舎の前に記念碑が建てられた。この言葉は、17世紀のイギリスの詩人ドライデン(J.Dryden)の詩にもあらわれている。

関西学院において人間を学び、早稲田大学において日本を学び、オックスフォード大学において世界を学んだ。

(永井柳太郎)

雄弁政治家と呼ばれ、昭和初期、電力国家管理など社会政策的事業に手腕をふるった永井柳太郎は、関西学院普通学部(関西学院創立時に設置された学部の一つ)に学び早稲田の教員を経てオックスフォードに留学した。軍部の台頭で、国会は次第にその機能を失っていくが、永井はキリスト教社会主義を捨てず最後まで議会に踏みとどまる。その彼を支えたのが関西学院の教育だった。永井は「私にとって学院は第二の故郷である。この母校においてキリスト教の感化を受けた。肉体の生国は加賀だが、精神の生国は学院である」と常に語っていた。

Keep this holy fire burning.

この聖なる火を絶やさぬように

(ペーツ)

太平洋戦争勃発前の1940年12月に、やむを得ず学院を去ることになった第4代院長C.J.L.ペーツが遺した言葉。学院への深い愛と祈りがこめられた惜別の言葉であり、学院の歩みに深く刻み込まれている。

Kwansei Gakuin depends upon you.

(アームストロング)

第2代高等学部長を務めたR.C.アームストロングは、常に“Kwansei Gakuin depends upon you.”(関西学院は君の肩にかかる)と学生に呼びかけ、自覚を促した。

白木真寿夫少年の像

(しらさぎますおしょうねんのぞう)

1933年4月1日、旧制中学5年生だった白木少年は、いとこと一緒に須磨海岸でボートに乗っている時、通航した汽船の横波を受け、海に投げ出されたいとこを助けに制服のまま海に飛び込んだ。いとこを救助船に預けることはでき

たが、白木少年は力尽きて海中に沈んでしまい帰らぬ人となつた。白木少年が「友のために自分の命を捨てるここと、これ以上に大きな愛はない」という聖書の言葉を生きたことを覚え、中学部精神を表す記念として像がつくられた。毎年、入学式の頃に美しい花が満開となる「白木桜」の記念樹と共に白木少年の像は生徒たちの心にその美しい生き様を刻み続けている。



関西学院のボランティア活動

関西学院には創立以来、社会奉仕～ボランティア活動の伝統が根付き、大きく育っている。古くは学院創立直後の1890年に発生した濃尾大地震への救援活動にはじまり、大正になっての関東大震災では救援団を現地に派遣し（表紙写真）、また横浜から神戸へと船で避難してきた人たちへの援助などを組織的に行つた。

その先輩たちの思いは現在に引き継がれ、学院のあらゆる学校で多彩に展開されている。

宗教総部は、岡山県長島にあるハンセン病患者のための国立療養所「邑久光明園」への訪問を1960年から始め、強制隔離され、差別や偏見を受けてきた入所者と礼拝し語り合う機会を持ち続けてきた。献血実行委員会も1963年から年に4回ずつ「献血週間」を実施し、献血者の合計はすでに8万人を超えた。

1995年に起きた阪神・淡路大震災では、震災直後から「関西学院救援ボランティア委員会」が組織され、2500人を超える学生・教職員らが地域の避難所などで支援活動に当たった。同委員会はその後、関西学院ヒューマンサービスセンター（HSC）に衣替えし、近隣小学校の学童保育の支援や、地域ボランティア組織と学内団体との連携窓口も担っている。

そうした伝統から、2011年の東日本大震災でもすぐに「関西学院大学東日本大震災救援委員会」が設置され、体育会学生本部は街頭募金を積極的に行い、複数の学生支援団体による「共働プラットフォーム」などがボランティアバスを運行し、多くの学生が現地に足を運んでいる。

災害時だけではない。学内では日常的に大小さまざまなボランティア組織が活動している。

NPO法人となった「ブレーンヒューマニティ」は子供キャンプ・海外ボランティア・不登校児の家庭教師。「up to you」は発達障害児の支援



献血実行委員会



阪神淡路大震災でのボランティア



東日本大震災のボランティア



「Eco-Habitat関西学院」による家造り



キルギスで語学教育 (国連ボランティア)

や、車いす生活者との甲山登山。「ALIVE」は神戸市の児童養護施設で勉強支援。「日本手話サークル はなまる」は聾児（ろうじ）との手話による交流。大学の募集に応じて、聴覚障がい学生の授業支援のためのノートテイクや、視覚障がい学生のための教科書などの対面朗読やテープ録音、英文の点訳などに取り組む学生は200人に上る。

近年はボランティア活動が国際化してきたことも大きな特徴だ。

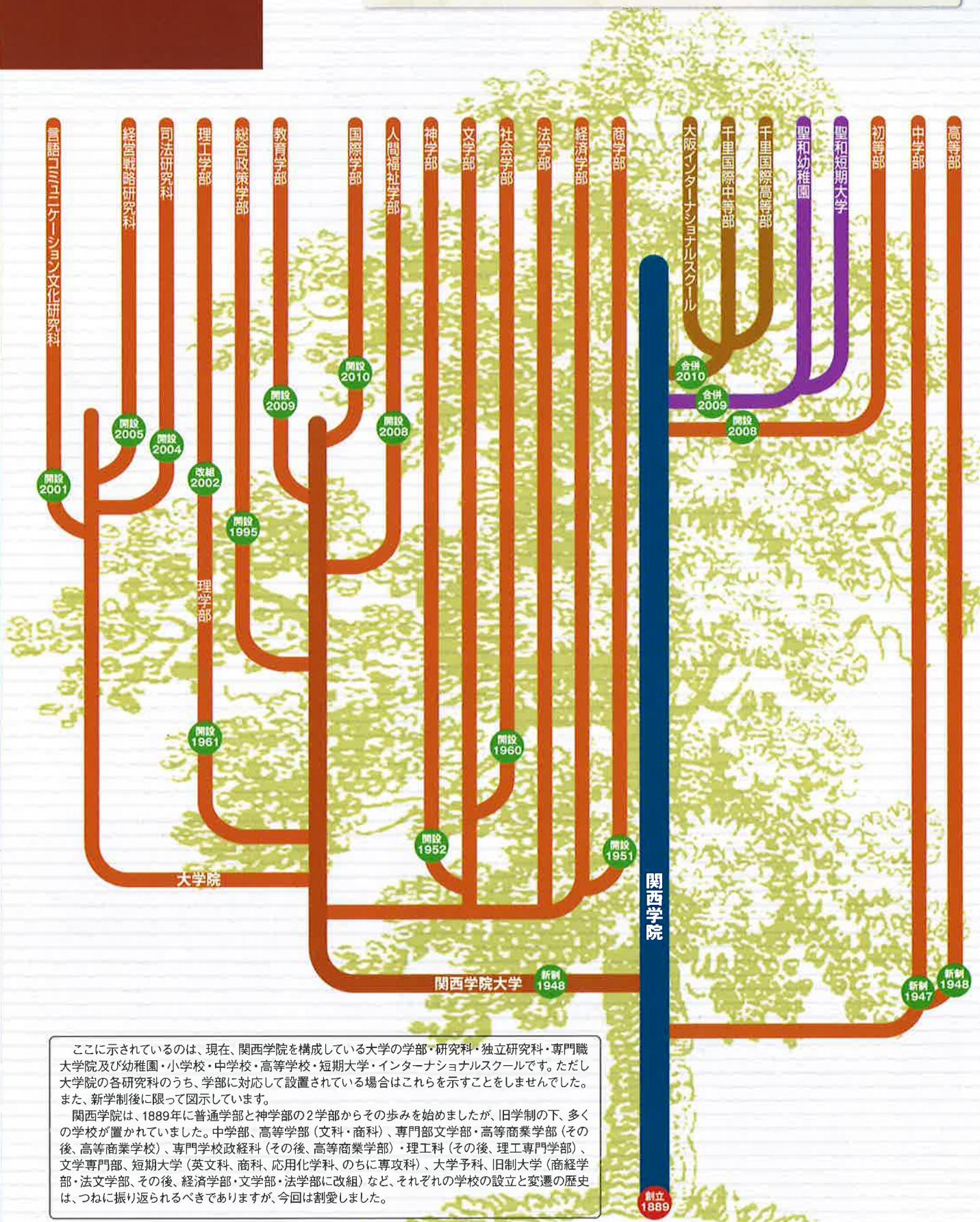
「Eco-Habitat関西学院」は、フィリピン・ミンダナオ島などでホームステイしながら住民の家造りを手伝ってきた。街頭募金などで寄付を集めてカンボジアに中学校を建設した「CREDO」。難民支援に取り組む「J-FUN Youth」。草の根レベルの国際交流・国際協力支援の推進を目的とした「CLUB GEORDIE」。「GLOBAL Eyes」は、環境問題をテーマとして活動し、エコツアなどを企画・実施してきた。

また、国連ボランティア計画（UN V）との協定に基づき、開発途上国へのボランティア派遣を2004年度から実施している。UN Vこうした協定を結んだ大学はアジアで初めて。参加する学生・院生は、4～5ヵ月ほど国連機関や国際NGOスタッフ、現地の人々とともに開発支援活動に従事する。2010年度までにサモア、斐ジー、フィリピン、マラウイ、ネパール、ガーナ、キルギス共和国など10カ国に計56名を派遣しており、2012年度には国連ボランティア派遣日本センターを設置する。

関西学院においてはあらゆるキャンパスで多彩なボランティア活動が行われ、ひとりひとりが“Mastery for Service”を、自分たちのできる形で実践し続けている。

History

「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」(マルコによる福音書4章30~32節)



関西学院のあゆみ

関西学院の創立（1889年）

創立者W.R.ランバスは神戸東郊の原田村（現在の王子公園の一角）に関西学院を創設、1889年10月から授業を始め学院憲法も制定した。西日本の指導者となる意味で校名を「関西学院」と名づけ、当時の進取の気風も反映して「クワンセイ」と漢音読みすることにした。このころは国家主義的な風潮が色濃くなりつつあったが、関西学院は世界を視野におさめる「国際性」を教育の旗印に掲げた。



原田の森キャンパスの校舎起工式

上ヶ原へ移転（1929年）

大学に昇格するため、阪神急行電鉄の甲東村上ヶ原用地（現在の西宮上ヶ原キャンパス）を取得し、4月1日から上ヶ原校地での第一歩を踏み出した。新校地の主要設計はW.M.ヴォーリズが担当。図書館を中心に中央芝生を囲んで主要建物を配置するキャンパスの基本ができあがった。正門の門柱とハミル館、そしてソテツの樹は原田校地から運ばれ、現在も上ヶ原に残る。



上ヶ原校地起工式



ベーツ院長の倫理学講義

大学設立の認可（1932年）

上ヶ原に移転した関西学院は、米・カナダ両教会から「財團法人関西学院」を経営母体とすることになった。1932年3月7日、大学令による関西学院大学の設立が認可された。関西学院のシンボルでもある時計台の大時計は、上ヶ原移転当時は未完成で「針のない時計台」といわれていたが、翌年3月に学生会が電気時計を寄贈した。



針のない時計台

戦争から戦後へ（1945年頃）

本土空襲でキャンパスも被災した。校舎などが海軍航空隊に徵用され、飛行訓練が連日行われた。図書館をはじめ各校舎は迷彩塗装され、時計台の正面に刻まれていた“Mastery for Service”的英文エンブレムも撤去された。終戦翌月の9月から11月にかけて授業を再開。戦時中も解散することのなかったグリークラブも学生を元気づけた。



軍事演習



迷彩の施された時計台

新制大学の発足（1948年）

新制大学として文学部、法学部、経済学部の開設が認可された。完全移行までの間、旧制大学と併存しながら新学制の教育は次第に充実していった。

総合学園へ

その後の60年余の間に神学部、商学部、社会学部、理学部、総合政策学部、人間福祉学部、教育学部、国際学部を開設。神戸三田キャンパス、大阪梅田、東京丸の内キャンパスも開設した結果、11学部、13研究科、23,000人以上の学生（大学院を含む）を擁する総合大学になった。

2009年に聖和大学と合併し、関西学院は、初等部、中学部、高等部、大学、大学院に加え、短期大学、幼稚園を擁する総合学園として歩み出し、この翌年には千里国際学園（高等部、中等部、大阪インターナショナルスクール）と合併し、より国際色豊かな学園となった。



西宮聖和キャンパス



千里国際キャンパス中庭

元建築地